

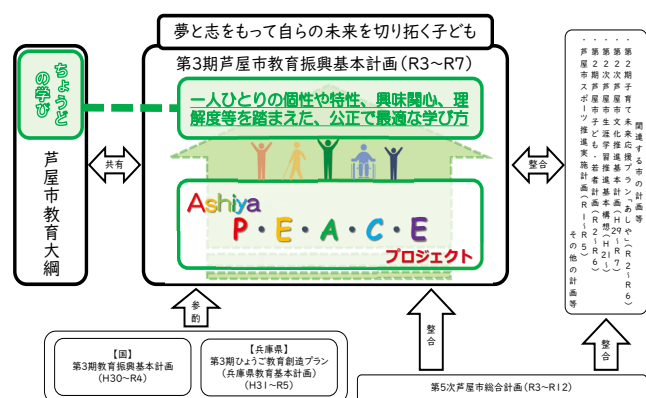
Ashiya PEACE プロジェクトについて

～ONE STEP！ 夢中になって学ぶ楽しさを～

1. はじめに — 教育の最上位目標 —

教育の最上位目標は何でしょうか？

芦屋市教育委員会は、子どもたちの多様なニーズに応え、「自ら未来を切り拓く力を身につける」ために「Ashiya PEACE プロジェクト」を推進しています。本プロジェクトは、第3期芦屋市教育振興基本計画に基づき、子どもたちが何より“安心”（PEACE of mind）して学ぶことをベースに、「自ら進んでチャレンジしていく環境を共に作り出していく」ことを目的としています。つまり、最上位目標としては「自ら未来を切り拓く力を身につける」「自ら進んでチャレンジしていく環境を共に作り出していく」ということと捉え、以下では、このプロジェクトの具体的な取り組みとその背景にある教育方針について詳しく紹介します。



2. Ashiya PEACE プロジェクトの背景 — なぜ、P・E・A・C・Eなのか —

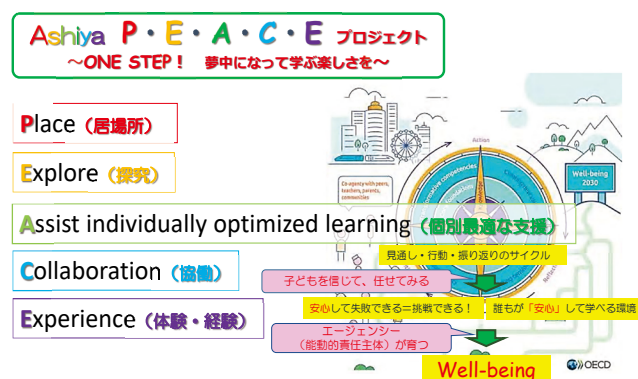
いじめや不登校の課題は本市も全国と同じような状況であり、令和5年度の不登校率は小学校 2.41%、中学校 7.96%、いじめ認知の件数は小学校 1,515 件、中

学校 118 件と看過できない状況が依然続いています。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響は否めませんが、約 150 年前から続く全員一律、画一的な教育システムから脱却し、個々のありのままを認め、多様な個性を尊重する教育への転換が求められていると考えています。本市教育委員会は、どの子にとってもまずは、学校園が“安心”して過ごせる場所でありたいと考え、子どもたちの本能的欲求（知りたい欲求、つくりたい欲求、コミュニケーションしたい欲求、表現したい欲求）を大切にしながら、“対話”を通じた最適な支援を行っています。

3. Ashiya PEACE プロジェクトの概要 — いじめ・不登校にも向き合いながら —

“安心”“対話”をキーワードとした Ashiya PEACE プロジェクトは、以下の 5 つのコンセプトから構成されています。



(1) Place (居場所)

すべての子どもたちにとって安心できる居場所を提供します。学校園が安心して過ごせる場所であることを重視し、個々の特性に応じた学びの場を提供します。

例えば、集団が苦手な子どもには、個別に学ぶ場を用意し、子どもたちが自分のペースで学べる環境を整えています。具体的には、「のびのび学級」や「わくわくルーム」など、様々な支援が必要な子どもたちに対する教室を設けています。

(2) Explore (探究)

子どもたちが主体的に学び、身の回りの社会や自然に対する疑問を追究する過程を大切にします。子どもたちの「知りたい」という欲求を尊重し、自ら立てた課題を追究することで、深い学びを実現します。探究活動を通じて、子どもたちは課題解決能力やクリティカルシンキングを養います。例えば、フィールドワークやプロジェクト型の学習を通じて、実際の社会（地域）とつながったり、自然の中で学んだりする機会を提供しています。

(3) Assist individually optimized learning (個別最適な支援)

子どもたち一人ひとりの特性やペースに応じた支援を行います。例えば、特定の環境が苦手な子どもには、その子に適した学習環境を提供しています。また、自ら立てた目標や計画に基づいて学ぶことを支援し、個々の学びを最適化しています。特別支援教育の充実も図り、特別支援コーディネーターの研修を通じて専門性を高めています。



(4) Collaboration (協働)

一人では解決できない課題に対して、仲間や教師と協力して取り組む力を育みます。協働を通じて、他者

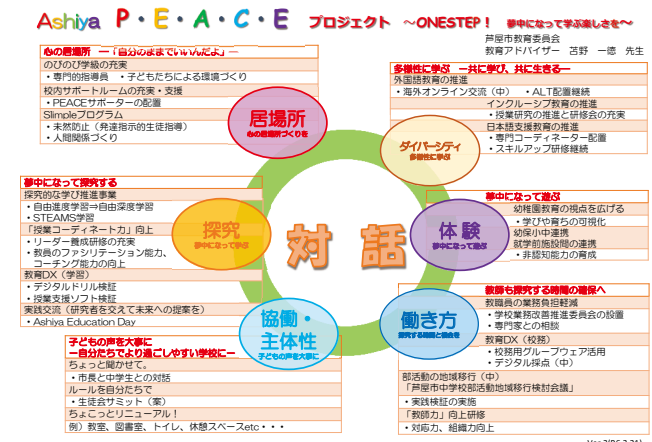
とつながりながら学ぶことの大切さを学びます。これにより、コミュニケーション能力やチームワークが自然に身に付きます。例えば、グループ学習や協働プロジェクトを通じて、他者と協働しながら学んでいく学び方を養うことを大事にしています。

(5) Experience (体験・経験)

子どもたちが夢中になって学び、遊び、失敗や成功を経験することを重視します。これにより、挑戦心を育み、これからの複雑で予測困難な未来を切り拓く力を養います。実際の体験を通じて学ぶことで、理論だけでなく実践的なスキルも身に付けます。例えば、地域との連携によるボランティア活動や職業体験など、多様な体験学習の機会を提供しています。

4. プロジェクトの具体的な取り組み — マニュアルではなく、ビジョンを示す! —

子どもたちだけでなく、教職員、学校園にもエージェンシーの育成を求めているため、本市教育委員会としてはマニュアル、〇〇方式や〇〇スタンダードを示すことはせず、各学校園、各教職員の内発的な改善意欲を引き出すことを大事に、ビジョン、コンセプトの共有化、まずは“安心”をベースとした取り組みが根付いていくよう“対話”を繰り返しながら進めています。



(1) 居場所の提供

① のびのび学級 (適応教室)

子どもたちが自分で学習計画を立て、自分のペースで学べる環境を提供しています。例えば、「わくわくルーム」では、仲間と協力して課題に取り組む活動が行われています。ここでは、子どもたちが互いに教え合い、支え合うことで、自然と協力する力が身につきます。

②校内の居場所

教室以外でも学べる環境を整備し、自分のクラスに入りにくい子どもにも対応しています。これには、校内サポートルームや図書室、特別支援教室など、多様な学びのスペースが含まれています。子どもたちは、自分がリラックスできる場所で安心して学ぶことができます。

(2) 教員の働き方改革

①校内組織の活性化

何より改善は校内の対話により推進されるべきであり、学校行事や授業カリキュラム、通知表等、「そもそも何のために」と本質を教師間で問い合う“対話”の場を大事にし、改善の核となるよう勧めています。

②学校業務サポーターの活用

文部科学省の通知に基づき、学校徴収金の管理や授業準備の補助など、教員の負担を軽減するためのサポート体制を強化しています。これにより、教員が教育に専念できる環境が整備されています。

③デジタル採点システムの導入

中学校における教員の負担軽減を図るため、デジタル採点システムを導入しています。これにより、採点作業が効率化され、教員はより多くの時間を子どもたちとの対話や個別指導に充てるできるようになりました。

平均超過勤務時間の経年変化

主幹教諭・教諭

	H30⇒R5
小学校	△10:05
中学校	△15:18

教頭

	H30⇒R5
小学校	△3:32
中学校	△20:39

※△は減

(3) ダイバーシティの推進

①インクルーシブを目指した特別支援教育

特別支援教育コーディネーター研修を実施し、多様な教育ニーズに応じ、その先の進路、地域でどう生きていくかも踏まえた柔軟な支援を提供しています。特別支援教育センター主催の研修会を充実させ、学校現場からの声を反映したテーマで開催しています。これにより、特別な支援が必要な子どもたちへの理解が深まり、より適切な支援が行われるようになりました。

②校則の見直し

子どもたち自身が当事者意識をもって自ら学校生活をより良いものにするために、学校規則の見直しも行っています。子どもたちの声を反映し、自分たちで話し合い、決定することで、主体性を育むとともに、より良い学習環境を整えています。

(4) 非認知能力の育成

本プロジェクトでは、いじめ、不登校の予防としても非認知能力の育成にも着目しています。これは、幼児期からの体験の積み重ねを通じて、子どもたちの自己肯定感や社会性、我慢強さ等を育むことを目指しています。例えば、幼稚園教育では、遊びや協働作業を通じて、友だち同士の協調性や問題解決能力につながる資質・能力を育てています。

(5) デジタル技術の活用

これからのAIの進化に対応するリテラシーを育成するために、デジタル技術の活用も、本プロジェクトの重要な柱の一つです。例えば、ICTを活用した授業やデジタル教材の導入により、子どもたちの学びを多様化し、個別最適な学習環境を提供しています。また、オンライン学習の機会を増やすことで、子どもたちは自宅でも学びを継続できるようになりました。

(6) 探究的な学び研究推進チーム「ONE STEPpers」

これまでの研究推進校を指定してきた体制をやめて、市内の教職員挙手制による研究推進チーム

「ONE STEPpers」を結成し、各校の子どもたちの実情に応じた探究的な学びを研究しています。

これまでの研究推進事業とは違い、「探究的な学び」に関心の高い教職員が自らの意思で集まり、協働しながら研究を推進する仕組みとなっています。

芦屋市の子どもたちの「学習意欲」や「協働性」、「自己肯定感」や「学校生活の充実感」を高める研究を進めています。



5. おわりに

— 1に“対話”、2に“対話”、3、4がなくて、5に“対話” —

本市教育委員会が推進する Ashiya PEACE プロジェクトは、多様な個性を持つ子どもたち一人ひとりに最適な学びの場を提供し、子どもたち一人ひとりの成長を支えることを目指しています。第3期芦屋市教育振興基本計画に基づき、学びの質の向上、学校園の魅力と信頼の向上、家庭・地域との連携強化を図りながら、安心して学べる環境を整えています。このプロジェクトを通じて、芦屋市の子どもたちは、自分の興味や関心を追究しながら、主体的に学び、未来を切り拓く力を育んでいます。今後も、子どもたちの多様なニーズに応え続け、持続可能な教育環境を提供するための取り組みを進めていきます。

本プロジェクトは、今後の教育イノベーションへの視座であり、子どもたちや教職員のエンゲージメントを育むものであります。多様な学びの場を提供し、子どもたちと共に well-being を追求する本プロジェクトは、未

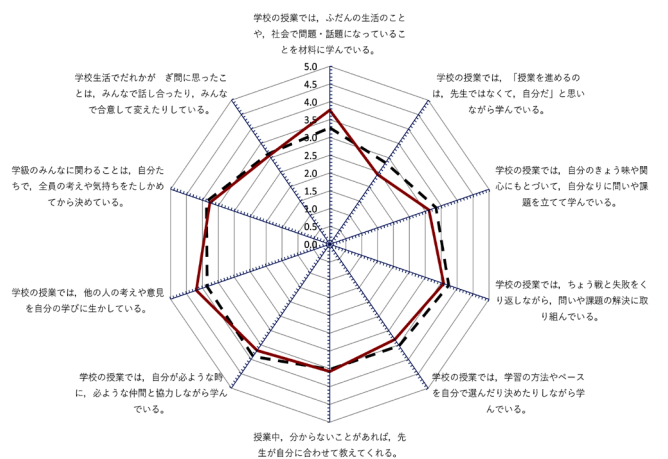
来の社会を担う人材育成に大きく寄与するものと期待されます。「1に“対話”、2に“対話”、3、4がなくて、5に“対話”」と各学校園、各教室に“対話”の文化をインストールしながら、これからも子どもたち、保護者、教職員、地域と共に“対話”することを中心に据えながら、教育の質をさらにアップデートさせていきます。

トピックス1 ScTN質問紙調査

ScTN 質問紙とは、一般社団法人 School Transformation Networking が提供する主体的・対話的で深い学びのための意識・実態調査質問紙であり、児童生徒が自己評価をするものです。

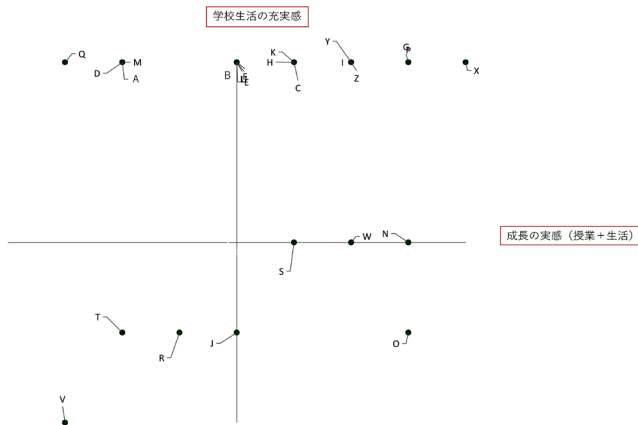
各学校（クラス）の「探究的な学び」「個別最適な学び」の実現状況を考察し、授業づくりや学級経営の共通指針として活用しています。

以下に示すのは、調査結果をレーダーチャートで示したものです。点線で示しているものが芦屋市の平均値であり、実線で示しているものが、各学校（クラス）の結果です。芦屋市全体の平均値を併せて示すことによって、各学校（クラス）の「特徴」を捉え、改善点の優先順位を決定したり、なぜその観点が低い（高い）のかを分析したりする一助としています。



また、個別の状況を散布図でも示しています。この散布図では、学校生活での「成長実感」と「充実感（楽しさ）」が一人ひとりプロットされます。散布図の右上に配置されている子どもは、「学校は楽しく成長できる場所だ」と感じていますが、散布図の左下に配置され

ている子どもは、「学校は楽しくなく、成長できる場所でもない」と感じています。担任は、この散布図を参考にすることによって、支援が必要な子どもを見出し、クラスの状況を確認したりすることができます。



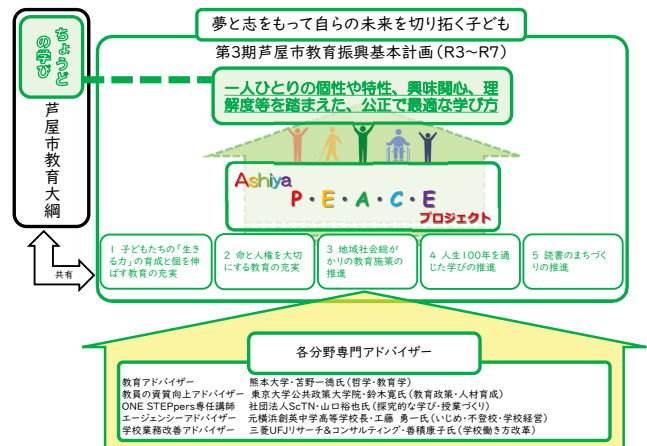
トピックス2 PEACEサポーター

小・中学校において、教職員と連携しながら、不登校児童生徒の個々の状況を踏まえ、学習や生活に関する支援を行い、校内サポートルームの環境整備や欠席者への支援を行うために、PEACE サポーターを各学校へ派遣しています。



トピックス3 各分野専門アドバイザー

「一人ひとりの個性や特性、興味関心、理解度等を踏まえた公正で最適な学び（ちょうどの学び）」の実現に向けて、教育アドバイザーとして熊本大学大学院教育学研究科准教授の苫野一徳先生をはじめ、各分野の専門アドバイザーの助言を受けながら、本プロジェクトを進めています。



芦屋市教育委員会 Ashiya PEACE プロジェクト

<https://www.city.ashiya.lg.jp/gakkoukyouiku/ashiyapeaceproject.html>

